

Title	ドイツ技術哲学史 : E. Zschimmer, Deusche Philosophen der Technik, 1937.
Sub Title	
Author	藤林, 敬三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1937
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.31, No.8 (1937. 8) ,p.1171(71)- 1176(76)
JaLC DOI	10.14991/001.19370801-0071
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19370801-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

観的なる限界的使用價値の客觀的表現として交換價値を觀るに至つた時、理論經濟學は新生面を打開するに至つた。茲に、ミルが經濟學の一部門として承認することのなかつた「消費」論の研究は、少くとも經濟學の全範圍を明瞭ならしむる一の法別、即ち限界效用の法則を吾人に紹介するものと爲つた。是に至つて總べての純理經濟學は最早交換上に於ける自由競争の推定に依存するものと想像すること不可能と爲る。經濟學はアレクザンダー・セルクレイグの孤島に於いても、ハーモニーの共產團體に在つても或る範圍まで其の適用を看出さる可きものと爲る。

ドイツ技術哲學史

—F. Zschimmer, Deutsche Philosophen der Technik, 1937.—

藤 林 敬 三

技術の哲學的研究は、從來殆んど専ら、ドイツに於いて開拓せられて來てゐる。そしてそれは既に相當の年數を経て居り、且つ稍々多數の文献がこの方面に存して居り、従つて吾々に取つては今日、技術哲學史に關する一つの獨立の著作が期待されていゝ筈である。しかもかくの如き期待は從來充分滿されることがなかつた。(註一)私が此處に紹介しやうとするツシンマーの著作は「ドイツ技術哲學者」と題されてゐるが、それは右の吾々の期待を滿す技術哲學史に屬する一文献である。(註二)

(註一) 但し技術哲學に關する従来の著作中には、過去の文献の學示と同時に、その批判的考慮を含むものゝ存したことは事實である。

(註二) 著者ツシンマーは現在カルルスルーヘ工科大学に於けるSilikattechnikの教授であるが、技術哲學に對しては相當以前から注意を拂つて居り、その著「技術の哲學」(T. Auf, 1914, 3. völlig umgearbeitete Auf, 1933)はこの方面に於ける一つの重要文献である。

ドイツ技術哲學者として、ツシンマーが擧げてゐるのは次ぎの六人に過ぎないのである。——参考のために彼等の主要著作をも示して置く。

- (1) Ernst Kapp, Grundlinien einer Philosophie der Technik. Zur Entstehungsgeschichte der Cultur aus neuen Gesichtspunkten, 1877.
- (2) Max Eyth, Lebendige Kräfte. Sieben Vorträge aus dem Gebiete der Technik, 4. Aufl., 1924.
- (3) Eduard von Mayer, Technik und Kultur. Gedanken über die Verstaatlichung des Menschen, 1906.
- (4) Ulrich Wendt, Die Technik als Kulturmacht in sozialer und in geistiger Beziehung. Eine Studie, 1906.
- (5) Alard du Bois-Reymond, Erfindung und Erfinder, 1906.
- (6) Viktor Engelhardt, Weltanschauung und Technik, 1922.

ツシンマーは右の、カップ以下エンゲルハルトに至る六人の技術哲學者の見解を、個々に稍々詳細に紹介し、批判することを以つてその研究の目的としてゐる。彼の著作を技術哲學史の研究として見れば、吾々はかくの如き序述に對して尙ほ種々なる批評と希望を述べ得るのであるが、この吾々の述べ得らるべき批評乃至希望の一つに對して、彼は豫めその著の序文中に凡そ次ぎの如く述べてゐる。

今日技術の哲學に關する諸家の研究は可成り多數に上つてゐるが、その世界觀、即ちその哲學上の基本的見解の相違に基づき、技術の本質に關する概念の辯證法的發展が、その著作中に觀られ得るが如きものを選んだ。そしてこの辯證法的發展に寄與する獨創的見解は、一九二五年以後現はれたドイツ技術哲學者の諸著作中には見出されな

るのである。

ツシンマーのかくの如き所言が彼の著書に對する態度を直截に表明してゐるものであると云つてよい。即ち、彼が問題とした六つの技術哲學論以外に存するものは問題の發展に重要な寄與をなすものではない。殊に最近約十年間に於けるこの方面の研究は確かに相當の數に上つてゐるのであるが(註三)、その何れのものも特に重要視されるべきものではない、と彼は考へる。しかし彼はこのために特別の考究を何等吾々に示す所がない。唯だ僅かに彼はウエントの見解を検討するに當つて、偶々デッサウエルの見解に關して凡そ次ぎの如き至極簡單なる脚註を附加してゐるに過ぎない。即ち、カトリック教徒であるユダヤ人哲學者デッサウエルの、スコラの「思辯的技術哲學は、ウエントの技術理解の神秘的見解に基づくものである」と(註四)

(註三) 讀者の参考のため一九二五年以後公せられた技術哲學に關する若干のものを示せば、次ぎの如きものがある。

- (1) F. Dessauer, Philosophie der Technik. Das Problem der Realisierung, 1. Aufl., 1927. (3. Aufl., 1933.)
- (2) H. Lilje, Das technische Zeitalter, 1928.
- (3) H. Luft, Kulturformung durch Technik und Wirtschaft, 1930.
- (4) O. Spengler, Der Mensch und die Technik, Beitrag zu einer Philosophie des Lebens, 1932.
- (5) P. Kranhals, Der Welsinn der Technik als Schlüssel zu ihrer Kulturbedeutung, 1932.
- (6) P. Frei, Wissenschaft, Technik und Ethik, 1932.
- (7) M. Schröter, Philosophie der Technik, 1934.
- (8) W. Schingnitz, Mensch und Begriff. Beitrag zur Theorie der logischen Bewältigung der Welt durch den Menschen, 1935, III Abt., XVI-XVIII Kap.

(註四) デッサウエルに對するツシンマーのかくの如き批評にも拘らず、吾々はより正しく、ツシンマー自身が彼の技術本質觀とデッサウエルのそれとの異同を先づ問題とすることを要求し得るであらう。即ち兩者の謂ふ技術理念の哲學的基礎は前者がカント的であるのに對して、後者は寧ろヘーゲリアンであると見做される。唯だ技術理念の理解に於いて、前者は「最善なる解決の、豫定された一義性」の理念とするに對して、後者は「技術の理念は精神の物質支配の力である」とする。——ツシンマーは以前には技術の本質を「物質的自由の理念」に求めたのであるが、今や彼は自ら自由なる概念を實踐的無意義を理由としてこれを放棄してゐる。(Zschimmer, Philosophie der Technik, 3. Aufl. 1938, S. 29-30.) 序ながら、このことはナチスの自己批判の彼に於ける一つの表現である。——そしてこの限りに於いては、技術理念の理解に關してツシンマーの方が同時に技術の文化的意義をよりよく表明し得てゐると云ふことが出来るであらう。勿論デッサウエルが彼の技術理念の實現を重視して居り、且つこれを問題とする所に技術の文化的意義が認められるのではあるが。

かくの如くにしてツシンマーの著作は、技術哲學史としては、單に彼が以つて獨創的見解を披瀝せるものと見做す若干の代表的見解を摘出してゐるに過ぎないのであつて、最近に至るまでの技術哲學に關する文献を詳細に學說史的に處理してゐるのではない。そして、勿論この故に彼は彼の著作を技術哲學史とは敢へて稱してはゐないのであるが、何人もこの點に多大の不滿を感ずるであらう。

がしがし、これと同時に吾々は次ぎの點を考慮することも必要である。ツシンマーは、先きに述べたやうに、一九二五年以後の文献中に特に見るべきもなしと云ふのではあるが、彼がその著作中最後に擧げてこれを問題とせるエンゲルハルトに關して、次ぎの如く評價せることは吾々の見逃し得ない所であらう。即ち云ふ「エンゲルハルトの哲學的立場を特徴づけるものは國民社會主義的理想主義である」と。従つてエンゲルハルト以後の技術哲學論は、もはや彼に取つては左程重要ではないのである。單にそれ許りではなく、ユダヤ人であるデッサウエルの見解の如

きは寧ろ彼の問題とすることを欲しないもの、一つであらう、とも考へられる。

二

以上私はツシンマーの「ドイツ技術哲學者」に對して内容的な批判を加へることなく、寧ろ第二義的な紹介と批評を行つたのであるが、此處に從來の技術哲學に對する總括的な、私の持つてゐる疑問を提出して置き度いと思ふ。技術哲學の課題は一文化現象としての技術、例へばツシンマーの云ふ所に従へば、より大なる全體の、文化發展一般の有機的部分現象としての技術(Philosophie der Technik, 3. Aufl. S. 13.)を考察するにある。かくて從來その問題は技術の本質並に技術の文化的意義の理解にあるとせられてゐる。そしてまた假りにツシンマーに従へば、從來の技術哲學上の見解の相違は二つの理由に基づくものであつて、その一つは各種見解の基礎をなす世界觀、乃至一般的哲學的見解の相違であり、他の一つは、同一の世界觀の上に立ちながら、技術現象と見做すべき事實の限定の相違する場合である。(Deutsche Philosophen der Technik, Vorwort.) 確かに吾々も亦この點を認めなければならぬ。しかし此處で私が疑問とする所は更らに次ぎの點にあるのである。

第一に、從來の技術哲學論の中には、その世界觀の如何を問はず、單にその所謂技術の本質だけを問題として、それだけで終れりとするかの如きものがある。(註五)しかし技術本質論は同時に技術の文化的意義を明かにするものでなければならぬ。第二に、從來の所謂技術哲學論なるものは徒らに神秘的、形而上學的、また觀念論的であつて、其處では問題とせられる技術の文化的意義は抽象的であり、超歴史的存在である。しかもかくの如く理解せられた技術の文化的意義と、技術現象の現實に持つ所の歴史的、社會的意義との關聯、謂はゞ技術の文化的意義の實現の問題の如きは、全く等閑に附せられてゐると云つていゝ。但し技術の文化的意義の實現の問題はもはや技術哲學

の問題ではなく、それは技術社會學の問題であると見做されるかも知れない。しかし私は尙ほ技術の文化的意義とその現實的社會意義との關聯を問題とすることが、技術哲學者に依つて輕視せらるべきではなく、寧ろこれを問題とすることが彼等に課せられた最後の任務であると考へる。

かくの如き意味に於いて、從來の多くの技術哲學論は尙ほ私には甚だしく不満足なものである。ツシンマーがその「ドイツ技術哲學者」中に取り擧げた諸家の見解に依つては、勿論私の技術哲學に對する不満は充分解消され得ない。またツシンマー自身の技術哲學上の見解に於いても、彼は歴史的事實としての技術現象の考察を問題とするけれども、それは決してよく技術の歴史的、社會的意義の實現を問題として、吾々を満足せしめ得る程度に至つてはゐない。

かくの如き從來の技術哲學に對する一般的不満にも拘らず、私は技術哲學史に關する一文献として、ツシンマーの「ドイツ技術哲學者」を讀者の一讀のために薦め度い。それは主として從來この種の獨立文献の皆無であつたことに依るのであるが、また技術哲學の問題に對する一つの入門書として相當價值あるものと考へられるからである。

(註五) ドイツ技術哲學を最初に吾國に紹介せられた、馬場敬治教授の著作「技術と經濟」の卷頭に於ける技術哲學論は單に技術本質論である。但し教授は技術の文化的意義を輕視せられたのでないことは、右の著作中にも既に明かであるが、尙ほ最近の著作である「技術と社會」(第一卷)に對する、私の本誌上に於ける紹介文に對して(本誌、第三十一卷、第二號)、教授が私に寄せられた書信に依れば、右の著作に次いで纏て公刊せられるに至る、技術と社會の問題に關する理論的考察の部分に於いて、技術の社會的意義に關する哲學的見解の批判的研究を公にせられるとのであるが、私は讀者に對してその成果を期待せられんことを附言して置き度いと思ふ。

—昭和十二年七月十二日稿—

Erich Carrel, Freihandel und Grösstmögliche Güterversorgung. 1937.

岩 田 仞

自由貿易主義はアダム・スミスを始め十八世紀の思想家に依つて叫ばれ、英國古典學派が自由貿易論を完成した。其の後リスト、ハミルトン等幾多の保護貿易理論家の擡頭を見たのである。併し乍ら、自由貿易論上に於ける古典學派の地位は支配的であるに對して、保護貿易論の内容は極めて雑多である結果、保護貿易主義の積極的主張は兎も角として、自由貿易主義の是非を廻る攻防二様の論陣は、主として古典學派貿易理論の批判と擁護と云ふ形をとつて顯はれた。古典學派自由貿易理論の根幹をなすものは比較生産費原理である。従つて自由貿易主義の論據としての比較生産費原理の妥當性に關して幾多の論争が行はれた。此處に紹介せんとするカレルの著書も亦、該原理に對する批判が主要なる内容をなして居る。

從來比較生産費原理に對して加へられた非難は、主として次の二つの點に向けられた。(一)比較生産費原理の現實への妥當性、(二)比較生産費原理の政策基準としての妥當性が之である。

比較生産費原理の現實への妥當性とは、現實の國際貿易が果して該原理に依つて規制せられ、その示す貿易の利益が實現するや否やと云ふ問題である。即ちそれは該原理の國際價格理論としての妥當性に外ならない。比較生産